

発行所〓社会通信社 発行人〓滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299―5367

郵便振替 〓 〇〇―〇〇―九―五八四三― 労金〓中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

自・公政権に引導を

伊勢 太郎：2

首脳部の決定を悲しむ

原野人：3

今度は社会主義論の否定

滝野 忠：7

―斎藤君はマルクスをどう歪めているか(五)―

◇ 信州松本通信 ◇

信州松本でヴツパータール交響楽団の

「英雄」を聴く 中澤 秀行：11

―エンゲルスと「ヴツパータールだより」のことども(上)―

読者からのおたより

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

旬刊社会通信

NO.1347

二〇二一年十一月一日号

二〇二一年十一月一日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

自・公政権に引導を

さきの国会は6月16日に閉じた。コロナ中心に情勢は激しく動く。国民は政治の力を求める。野党は皆に「国会を開き国民に安心を」求めた。皆は「おれは「聞く耳」をもたぬ」とつっぱねた。権力闘争は皆を地獄に落とし、「聞く耳」もつのがとりにえ」と吹きまくる、一見人のよさそうで日和見な人物を総裁・総理にすえた。彼は安倍・麻生に忠義をつくした、政治腐敗、反動の「戦犯」である。

岸田氏は猿の知恵しかもたぬようだ、「昔の轍(てつ)は踏まぬ」との「解散・総選挙」宣言である。猿の知恵はしょせん浅知恵にすぎず、国民にみぬかれた。「御祝儀相場」を期待した第一回調査支持率は上がらない。上がったのは「安倍・菅政治からサヨナラせよ」との声である。

政治とカネの問題で大臣をやめ、一時トズラした人物を党の要に、極右反動の女性を政策責任者とした。国民はだまされつづけてきた。そして学ぶことを学んだ。その結果が、共闘のあり方、世論調査に出た。株式の「相場」も上がらない。八日連続下げた。様式相場を支えるのは外国人投資家、とくに機関投資家だ。彼らは、「今度の内閣は短命」と読んでいるのかもしれない。

日本の保守化、反動化はものすごい。名はあげぬが10〜20年前なら「りっぱな」保守と自分も世間もそう考えた著名な評論家が「ぼくがリベラルとされるまでに、世の中変わってしまった」と自嘲ぎみに語るまでである。保守化は「新しい憲法をつくる力が憲法だ」と、憲法を守る力とその皆を弱めることをめざした政・財・官・労・学の総保守勢力による大衆運動、労働組合圧殺攻撃の結果である。労働戦線再編、国鉄分割民営化、中央集権化、そして政界再編・小選挙区制を一体として進めた。

生産力と生産関係の矛盾の深まり、政治の腐敗と反動化は抵抗と反抗を生む。熾(お)きは深く静かに潜行し、大地に広がる。コロナが矛盾をさらに拡大した。

証明が野党四党と市民連合(安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合)が9月8日結んだ野党共通政策だ。今回の総選挙で自公政権を倒し「命を守るために政治の転換」を呼びかけた。

共通政策は①憲法に基づく政治の回復―安保法制、特定機密保護法、共謀罪などの法律の違憲部分を廃止し、コロナ禍に乗じた憲法改悪に反対、②科学的知見に基づく新型コロナウイルス対策の強化―医療・公衆衛生の整備、エッセンシャルワーカーの待遇改善、万全の財政支援など、③格差と貧困を是正する―消費税減税を行い、富裕層の負担を強化するなど公平な税制を実現、④地球環境を守るエネルギー転換と地域分散型経済システムへの移行―再生可能エネルギーの拡充により、石炭火力から脱却し、原発のない脱炭素社会を追求するなど、⑤ジェンダー視点に基づいた自由で公平な社会の実現、⑥権力の私物化を許さず、公平で透明な行政を実現する、である。

自公政権を倒せ、倒せる姿をみせよ、それは共通の政策と野党の共同の姿を示すことだとの声は急激に高まった。立憲民主党と共産党は9月30日、党首会談をおこない、政権協力で合意した。全文はこうだ。

両党は以下の点を協力することで合意した。

- 1、次の総選挙において自公政権を倒し、新しい政治を実現する。
- 2、立憲民主党と日本共産党は、「新政権」において、市民連合と合意した政策を著実に推進するために協力する。その際、日本共産党は、合意した政策を実現する範囲での限定的な閣外からの協力とする。

- 3、次の総選挙において、両党で候補者を一本化した選挙区については、双方の立場や事情の違いを互いに理解・尊重しながら、小選挙区での勝利を目指す。

この合意を共産党は①99年の歴史のなかで、政権協力の合意を得て総選挙をたたかうのははじめて、②国民連合政府提唱（2015年9月）からの努力で「政権交代のスタート台」にたつたと政権交代の実現、新しい政権前進の最大の推進力となるのは日本共産党と、党の主体性強化、躍進を訴える。共産党が共闘に埋没せず、独自性を追求する姿がここにある。

（伊勢 太郎）

首脳部の決定を悲しむ

(1) 驚天動地の事態

『週刊新社会』9月28日号の『労働短信』に不屈きなことを書いたから、伊勢氏の執筆を中止させるという。党首脳部としては、斎藤幸平氏の著作を批判したことが許しがたいことだという。驚天動地の事態である。

斎藤氏の理論がいかの間違っているかは、我々がかねてから『社会通信』で明確にしてきたところである。（4月15日号、5月1日号、7月15日号、9月1日号、以下毎号）科学的社会主義の理論に基づいて策定された我が党の綱領『21世紀宣言』と比較して、いかに非科学的な小ブルジョア理論であるかは7月15日号に詳しい。マルクス主義を多少とも本気で学んだ人ならば、これらの批判だけでも斎藤氏の理屈の基本的な誤りは明らかであろう。

書記長（機関紙局長）は斎藤氏の著作を読み始めてまだ読んではいないが、読むまでもなく批判を許せないという。首脳部としての決定らしい。書記長によると、特に斎藤氏は「いのちの安全保障を考える『共同テーブル』」の賛同者になっているのに機関紙上で批判するなどんでもないと、近畿の党から嚴重な抗議が来ているという。『共同テーブル』はといえば事実上は社民党からの呼びかけであり、新社会党の機関ではない。賛同者であろうとなかろうと批判することが禁じられるはずもない。

党内の機関であっても、相互に批判して悪かるうはずもない。批判の禁じられるところ、衰退はあっても発展も成長もない。

かくしてわが首脳部は、維新の会の基本政策と全く同じBI（ベシックインカム）を機関紙上で宣伝し、党を混迷に陥れ、竹中平蔵君に笑われる事態になった上に、小ブルジョアの・非科学的社会主義によって、我が党を存立の危機に陥れようしている。

『共同テーブル』の賛同人とされた皆さんの多くは呼びかけの中身に賛同していない。なお『共同テーブル』に対する約2百名の賛同者リストを読んでもみると、大半の皆さんは服部良一氏や佐高信氏らの趣旨に賛同せず、自分の思いや異議を述べ

ている。あるいは目的を知らずに空しい期待を寄せている。主要な意見は次の通りである。

菅井益郎（国学院大学名誉教授）

埼玉の市民運動有志が集まり「衆院選野党統一候補を推す埼玉県民交流会の集い」というのをやっています。何としても野党が統一して勝たねばなりません。「共同テーブル」の呼びかけ文に「社民党の呼びかけ」という言葉が2度も出てきているのに共産党はこの文のどこにも出てきませんし、立憲民主党も出てきません。真に野党共闘を目指すならこの2党も入れる必要がありますね。

黒川 征一（元徳島県三好市長）

反独占・反自公の戦線統一の構築をして下さい。来るべき衆議院選挙、参議院選挙で労働者代表の政府確立を願っています。

小出 裕章（元京都大学原子炉実験所助教）

（前略）「今だけ、カネだけ、自分だけの政治を倒したいと願います。自民・公明・維新の政治を倒すためには広範な連帯が不可欠と思います。

島袋 善弘（山梨県立大学名誉教授）

自公政権に代わる勢力の結集でまともな政治、まともな日本をつくると思います。

鈴木 裕子（女性史研究家）

お粗末きわめる自民党政権がまだ続いているのが不思議です。「天皇制化の与えられた民主主義」から脱却するために、広く社会改革・平和・民主勢力の結集は不可欠だと存じます。

趙 博（芸人）

反戦・反核・反差別・反貧困・反自公維の統一戦線を！

寺尾 光身（名古屋工業大学名誉教授）

小異を残して大同につこう。嘘、隠蔽、公文書改竄まみれの自公政権は倒さねばならない。「前文」に則った憲法運用を！

川村 晃生（慶應義塾大学名誉教授）

戦後最悪の政権のもとで、国民の困難は増すばかりです。政権交代を実現させるための努力を諦めずに続けましょう。

小西 誠（軍事ジャーナリスト）

憲法9条擁護―対中国軍拡反対の共同戦線を創り出しましょう！

熊沢 誠（甲南大学名誉教授）

選挙活動に収斂しない労働運動と社会運動の再興に寄与したいですね。

嶺井 正也（専修大学名誉教授）

自公政権、何としても打倒！

赤松 竜

（全国空襲被害者連絡協議会・会員）
民間人空襲被害者への国家補償を訴え続けて、100歳で国会前に座り込み、5年前に101歳で永眠された全国戦災被害者連絡会会長の杉山千佐子さんの遺志を継いで、憲法9条が実践される日本社会・政治を願って、協力・協同いたしましょう！ 日本共産党との共闘も重点にいたしましょう！

他の賛同人の意見は誌面の都合上省略するが、服部氏や呼びかけ人の本音（意図）

は、参院選に社民党の複数候補者と合わせて、新社会党からの候補者も並べて（金も出させて）、社民党の議席を確保して政党要件を確保したい、ということである。そのため新社会党は科学的社会主義の基本路線も捨てて、社民主義や斎藤氏のような小ブルジョア社会主義に賛同すべしということであろう。

これに対する我々の回答は『社会通信』10月1日号の山村論文』『急がば回れ！』社会主義政党建設論』に尽きる。「すべては大衆闘争を起こし、そこに参加し、先頭に立って党の旗やのぼりを打ち立て、苦労はまさに買ってでも、辛抱強く我慢強く闘うこと、これを今の全国の新社会党員一人ひとりが漏れなく決意し、明日から実行すればすべての問題は解決すると思う。他の政党の政党要件をあてにしたりせず、自力で大衆闘争にとびこもう。『急がば回れ！』である。」

(2) 斎藤幸平氏とエコロジー社民主義（社会主義）

『週刊新社会』10月13日号6面で長南博邦機関紙局長の「労働短信掲載記事に対する謝罪」を読んで驚いた。第一に長南書記長がマルクシズムをいかに学んでいないかが露見したことである。第二に斎藤氏の著作を批判したことが一方的であり、氏の人格をも傷つけるものであり、また「労働短信」の趣旨にそぐわないものであるとしていることである。

斎藤氏が指摘するまでもなく、マルクスは資本論執筆後もメモや短文を残している。しかしマルクスが斎藤氏と決定的に違うところは、『資本論』で緻密に解明した、剰余価値の法則や資本主義的蓄積の一般的法則やその歴史的傾向について、少しも修正したり手直ししたりしていないことである。

これに対して斎藤氏は、地球環境問題や失業や貧困等々を根本的に解決するには、労働者階級が収奪者（独占資本）を収奪して、生産手段を労働者自身の共有物に転化することが不可欠であることを理解できない。あれこれの協同組合などを大きくしていけば、独占資本の支配下でもこれら諸問題を解決できるし、やがて資本主義を死滅させることができると考えている。

労働者階級が科学的社会主義を学ぶ学習会を作り、社会主義政党を組織し資本との闘いを強めながら、やがて国家権力を独占資本から奪い取る必要はないのである。プチブルジョアの理論家というほかはない。

『労働短信』が労働運動を混迷させる誤った非科学的理論を、労働運動の前進のために、根本的に強く批判したのは当然のことであり、斎藤氏にお詫びする必要は毛頭ないし、伊勢氏から筆を奪うなど言語道断である。

首脳部に必要なことはマルクシズムを学ぶ専従中執学習会を作ることである。

同紙同日号の2面には『共同テーブル』積極的に担う』として「共生・連帯近畿が集会」と報告されている。集会で服部良一社民党幹事長は問題提起し、エコロジー社民主義（社会主義）等々を柱とした政治勢力の結集の必要性を訴えたのである。

「エコロジー」とは何かと検索してみると、「本来生態学という意味をもつ言葉です。最近では、環境保全や地球環境に負荷をかけないという意味で用いられるようになりました。自然環境保護運動や、人間生活と自然との調和、共存をめざす考え方として

でも知られています。」とある。

「どうやらエコロジーとか地球環境保全運動といえ、社民主義も社会主義も同じであつて、区別する必要もないということらしい。社民主義といえ、資本主義、独占資本の支配を前提にしている、社会主義とは根本的に異なる。今日では新自由主義が国家独占資本主義にとつてかわり、多国籍化とともに独占資本は消え失せたと夢想している諸君には、社民主義と社会主義の違いも消え失せているらしい。修正資本主義も社民主義も社会主義も、「エコロジー」の前には大差はなくなるらしい。」

マルクスは資本家の標語、行動様式についてこう書いている。

「その周囲の労働者世代の苦悩を否認するために、しごく「尤もな理由」をもつて資本家が、将来の人類の頹廢や、結局はどうしても止めることのできない人口減少を予想して、その実際の運動を制約できるかどうかは、起こりうべき地球の太陽への墜落によって、制約するかどうかと同じである。すべて株式投機では、いつかは雷が落ちるに違いないことは知つていても、自分は黄金の雨を受け集めて、安全な場所へ運んでしまつてから、雷は隣人の頭にあたるということが、誰も望むところである。後は野となれ山となれ！これがすべての資本家と、すべての資本家国民との標語である。」（『資本論』岩波文庫版②159頁）

かくして独占資本は、有機水銀やカドミウムを不知火海や日本海に垂れ流し、PCB（ポリ塩化ビフェニル）を食品製造の熱媒体や、電機器の絶縁材や、感圧紙の塗料溶剤にまで使つて日本中に拡散し、アスベストの強い発がん性が分かつてからも大量に輸入して、断熱材や建材等に広範に使用してきた。

独占資本とその国家は、この地震列島で多数の原発を建設し、稼働させてきた。今では耐用年数を過ぎた老朽原発まで次々と稼働させようとしている。

全原発を速やかに停・廃止させることが急がれる。

洋上風力こそ開発を急ぐべき自然エネルギーの本命である。

資本にとつては、有機的組成が高度化して不変資本に比べて可変資本が小さくなつている原発は大いに魅力的である。逆に不変資本に比して可変資本が大きくなり、雇用を増やさねばならない風力発電などは、国民にとつてはいかに魅力的であろうとも、資本にとつては全く魅力がない。

二酸化炭素排出量の大きい石炭などの大型火力は、資本にとつて、原発に次いで魅力的である。

独占資本の「標語」と労働者国民の利益とは、エコロジーをめぐるてもこのように根本的に異なるのである。低周波音波の被害が生じないよう、人々の生活圏から十分な距離をとることも洋上では容易である。

たびたび書いてきたように、風力発電の導入ポテンシャルを、経産省は陸上で2億9千万kw、洋上で15億kwと算定している。ちなみに現在の全国の総発電設備容量は2億5千万kwである。

エコロジーでは社会主義も社民主義も同じだなどと夢想することをやめ、独占資本を孤立化させる闘いを強めていけば、風力だけで全電力を賄うことも、夢ではなくなる。夜の前発用に造られた揚水式発電所は風力発電に活用することができる。

時にはドン・キホーテの如く風車に突入する粗忽な鳥もいるようである。人間の世界でも小ブルジョア理論をもって労働者階級に突入してくる人は後を絶たないが、我々は闘いの中で学習会を組織して理論武装する以外に道はない。(原 野人)

今度は社会主義論の否定

— 斎藤君はマルクスをどう歪めているか (五) —

晩期マルクスの案山子

『唯物史観の否定から—斎藤君はマルクスをどう歪めているか(三)』(『通信』1345、21年10月1日号)で、斎藤君のマルクス改ざん、歪曲、否定の手法をこう書きました。

『『人新世の「資本論」』はじつに冗舌、うすっぺらな本です。はっきりしていることは、自分のつくった案山子(後期マルクス像なるもの)に合わせ、着物を着せたり、剥いだり、着せ替えたり悦にいらっていることです。』

斎藤君は「晩期マルクス」なる案山子をでっちあげ、「コモン」という概念を導入し、マルクスの着せ替えごっこをはじめます。たとえば、「コモン」は、アメリカ型新自由主義とソ連型国有化の両方を対峙する『第3の道』を切り拓く鍵だといっている。つまり、市場原理主義のように、あらゆるものを商品化するのでもなく、かといって、ソ連型社会主義のようにあらゆるものの国有化を目指すものでもない。第3の道としての(コモン)は、水や電力、住居、医療、教育といったものを公共財として、自分たちで民主主義的に管理することを目指す。(141頁)

「第3の道」、この言葉、新らしもの屋の斎藤君の本性をあらわしてくれています。これは、マルクス主義を歪めることを目的に、反マルクス主義者たちが発明した古い古い言葉です。世界で、そして日本でもたびたび聞かされたんじゃないやありませんか。みなさん、おおいに笑いましょや、斎藤君のいう「新しい」マルクス像は、けっきよく歪められたマルクス像の焼き直しにしすぎないことを、そしてマルクスを歪める思想はいつでもどこでも、ここに落ち着くことです。それは、原野人論文(No.1346)が「資本主義的法則に反して、資本主義の中に小ぢんまりとした共有社会をつくることは、…どんなに努力しても亡びる他ない」と向坂の『マルクス伝』から引用しているとおりです。

細工

斎藤君は唯物史観を歪める結果、社会主義の内容を歪めています。「コミュニケーションは(コモン)を再建する」ことだと、マルクスの社会主義論を「労働者たちの自発的な相互扶助が(コモン)の実現」(144頁)とネジ曲げます。

そのために「作られ」ているのが、「ヨーロッパ中心主義」という言葉です。『資本論』第一版序文にこうあります。

【物理学者は自然過程をこういうふうに見察する。すなわち、自然過程がもつとも確かな形態で、攪乱的影響によって混濁されることもっとも少なく現われるばあいをとるか、あるいは可能なばあいには、実験を、過程の純粹な進行が確保される条件のもとで、行なうのである。私がこの著作で探究しなければならぬものは、資本主義的

生産様式であり、これに相応する生産諸関係および交易諸関係である。その典型的な場所は、今日までのところイギリスである。これが、私の理論的展開のおもな解明になぜイギリスを用いるかの理由である。だが、ドイツの読者がパリサイの徒のようにイギリスの工業労働者や農業労働者の状態について肩をすくめ、あるいはそれと同時に、樂觀的に、ドイツではことはまだ永い間そんなに悪化はしないのだといってみずから慰めているとすれば、私は彼にこう呼びかけなければならない。「ここで報告しているのは君のことなのだよ！」と。

それ自体としては、問題は、資本主義的生産の自然法則から生ずる社会的敵対関係の発展程度の高いか低いかということにあるのではない。問題として取扱うのは、これらの法則自体であり、鉄の必然性をもって作用し、そして貫徹するこれらの傾向なのである。産業的により発達している国は、発達程度により低い国にたいして、その国自身の未来の像を示すだけのことである。【『資本論』岩波文庫第一分冊13〜14頁】

しっかりと読み解かなければならないのは引用部分全体です。ところが斎藤君は大事などころはほったらかしにし、放り投げ、末尾の「産業的により発達している国は、発展程度により低い国にたいして、その国自身の未来の像を示すだけ」を引用します。これを「ヨーロッパ人の歴史を世界の残りの部分に勝手に投影してしまっているように見える」と、「勝手に」解釈し、マルクスを歪めることに精を出します。晚期マルクスは古代の共同体に関心をいだき、それを「コモン」として再興しようと考えた、というようにです。

この「つくりごと」をマルクスのベラ・ザスーリッチへの手紙を使い「この手紙には、マルクスの思想的到達点が秘められている」（173頁）といったように歪めることに夢中になるのです。ここでも、やはり「秘められている」と独断と偏見だけで論証はありません。

19世紀ロシア

斎藤君はマルクスがベラ・ザスーリッチにあてた手紙にこだわります。理由はかんとん、彼はこの手紙を根拠に、マルクスを歪めたいとしているからです。歪め方をじっくり点検します。

ベラ・ザスーリッチ（1851〜1919）はロシアの女性革命家です。ちなみにレーニンが1870年の生まれです。ロシア帝国は北方の「白熊」として、ヨーロッパ反動勢力の中心であり続けておりました。反動の拠点ロシアは19世紀、ゆっくりとしかし確実に揺れ動き始めました。自由主義的知識人や青年将校が皇帝ニコライ一世の即位に反対して、1825年起こしたのがデカブリストの乱です。この時代、ヨーロッパは毎日が戦争です。クリミア戦争（1853〜56）の敗北は帝政を揺り動かす、上からの近代化が始まります。農奴解放令（1861）、そして産業革命、工業化です。「解放令」は農民、農奴をさらに強く地主にしばりつけました。ツァーリズムの矛盾は深まります。「ヴナロード」（人民の中へ）をスローガンに知識人・学生の運動が高まります。いわゆる「ナロードニキ」運動です。皇帝アレクサンドル2世暗殺は1881年です。

ナロードニキ運動は、ロシアの古くからの共同体を基礎にした社会主義思想です。ザスーリッチがどんな女性闘士だったかを知りたい人は、『共産党宣言』ドイツ語版

序文1890年（1882年ロシア語版への序文―マルクス・エンゲルスを含む）（岩波文庫版12頁）をごらん下さい。ザスーリッチは『宣言』をロシア語に訳し、1882年ジュネーブで出版され、マルクスとエンゲルスが序文を書いています。

ザスーリッチとマルクス

ベラ・ザスーリッチはロシアのナロードニキです。19世紀70年代以降、ロシアの社会主義革命家たちはマルクスの『資本論』をめぐり、大きな論争をおこなっておりました。マルクスはロシアの土地共同体制度や経済状況を調べ『資本論』に反映するため、ロシアの知識人、社会活動家と連絡をとり資料を集めておりました。

ザスーリッチは1881年2月16日、マルクスに「世界のすべての国々が資本主義的生産のすべての段階を経過することが歴史的に必然的だという理論について教えてください」と教えを乞う手紙を出しました。斎藤君がいうような「介入」ではありません。それにたいして、マルクスは1881年3月8日、ザスーリッチに「私の学説と称されるものについてのごかいについて少しも疑問をいだかれないようにするのは、数行で足りるのではなからうかと考えます。」（ME全集35巻136〜7頁）とこう返事しています。

【資本主義的生産の起源を分析して、私はこう述べています。

『それゆえ、資本主義制度の根底には、生産手段と生産者の徹底的な分離が存在する。…この発展全体の基礎は、耕作者の収奪である。イギリスほど徹底したやり方でそれがおこなわれたところはまだない。…だが、西ヨーロッパの他の国々も同じ運動をたどるであろう』（『資本論』、フランス語版、3〜5頁）

ですから、この運動の『歴史的宿命』は、はっきりと西ヨーロッパ諸国に限られます。この限定の根拠は、第三二章の次の文に示されています。

『自己の労働を基礎とした私的所有は…他人の労働の搾取を基礎にした資本主義的所有者にとって変わられるようになる。』（同前、341頁）

ですから、この西方の運動では、私的所有の一つの形態から私的所有の他のひとつの形態への転化が問題です。これに反して、ロシアの農民にあっては、彼らの共同所有が私的所有に転化されなければならないでしょう。

ですから、『資本論』であたえられた分析は、農村共同体の生命力を肯定する理由も、否定する理由も提供しておりませんが、しかし、私がおこなった特殊研究、しかも原資料にあたって材料を調べ特殊研究によって、私は、この共同体がロシアの社会的再生の視点だと確信するようになりました。しかし、それがこのように作用することができるようになるのには、まずもって、あらゆる方面からそれに襲いかかってくる有害な影響をとり除かねばならず、次には、それについて、自然発生的発展の正常な諸々条件をほしうしてやらねばならないでしょう。】

読書・勉強の仕方

少し長い引用になりました。マルクスの文章、文体そして言わんとすることもわかりやすく、誤解したり曲解したり、歪めたりする余地はいっさいありません。前半部でマルクスがいつているのは『『資本論』第一巻』第二章のいわゆる本源的蓄積の要約です。後半部はロシアの農村共同体がどういう変化をたどるかは、国内と国外の

流れにかかわるといつているだけです。

ところが、斎藤君はマルクスの返信はそっけない、だが「3度書き直ししている」、これは核心をついているからだ、勝手に解釈し、ここでやっぱり一人で踊っているんです。斎藤君がいうように、マルクスはザスーリッチに返事するため4つの草稿(下書き)を書いていきます。MEGAをひけらかさなくとも、『全集19巻』の386〜409頁にあります。いずれも長いものです。ですから、マルクスはわざわざ「原資料にあたって材料を調べた特殊研究」といつているんです。3つの草稿、これがマルクスの勉強法、ザスーリッチへの返事への研究方法なんです。斎藤君のようなミスもクソもごっちゃにして得意がるへボなトンカチ頭とは格がちがうのです。

『宣言』のなかのロシア

ここまでと、感心させられるのはーじつさい、恥の上塗りにすぎないのですがー前にも述べた『宣言』のロシア語版序文を天まで持ち上げ、マルクスは「資本主義という段階を経ることなしに、ロシアはコミユニズムに移行できる可能性を「認めた」と、これまた勝手に舞い踊っていることです。

この序文が書かれたのはマルクス没の一年前の1882年1月21日です。この序文を全文掲載したいのです。この序文に、マルクスの思想が全世界の労働者階級の心をしっかりとらえたことに喜び勇気を得ています。マルクスの思想が輝きをましているのですよ、斎藤君が歪めている、次の一節だけを少し長くなりますが引用します。

『共産党宣言』の課題は、近代のブルジョアの所有の崩壊(没落)が不可避免的に迫りつつあることを布告することであった。しかしロシアでは、資本主義(的体制)のべてんが急速に栄え、ブルジョアの土地所有がいまようやく発達しつつあるが、またそれと並んで、土地の過半は農民の共有となっている。そこで次のことが問題となる。ひどく分解してはいるが太古からの土地所有の一形態(原生的共有の形態)であるロシアの農民共同体は、共産主義的共有のより高い形態(土地所有のより高い共産主義的形態)に直接に移行しうるであろうか? それとも反対に、そのままにそれは西ヨーロッパの歴史的発展においておこなわれたと同じ崩壊過程を通過しなければならぬであろうか?

この問題に対して今日可能な唯一の解答は、次の如くであろう。もしロシア革命が西ヨーロッパにおけるプロレタリア革命への合図となり、その結果両者がたがいには補いあうならば、現在のロシアの土地共有制は、共産主義的発展の出発点として役立つことができる。【(14〜15頁)】

この文章も誤解が生まれる余地がないほどに、わかりやすいですよ。まさに読んで字のごとくです。斎藤君はこれを「共同体からコミユニズムの発展を開始することができる」証拠というのです。マルクスはこの文章のどこでそんなことを言っているのでしょうか。

斎藤君はこんな妄想のもとに、古代的共同体が「平等主義」ー彼にはこれが共産主義ー実現のもとになると考えるのです。

マルクス・エンゲルスの諸著作の読み換えはこんなふうに行われていくのです。

信州松本でヴツパータール交響楽団の「英雄」を聴く

エンゲルスと「ヴツパータールだより」のことも（上）

(一) 『マルクス・エンゲルス全集』第1巻の「ヴツパータールだより」

『マルクス・エンゲルス全集』（大月書店）第1巻には、一八三九年から一八四四年までのエンゲルスの論考が収録されています。エンゲルスは一八二〇年十一月二十八日生まれですから、初々しい青年の作品であります。これらの冒頭を飾るのが、「ヴツパータールだより」ⅠとⅡであります。

ヴツパータールの名前を意識したのは、松本市音楽文化ホールに異動してオーボエ奏者の渡辺克也さんを知ってからです。克也さんは当時ベルリン・ドイツオペラの首席オーボエ奏者でしたが、前職はヴツパータール交響楽団のオーボエ奏者だったからです。

さて、「ヴツパータールだよりⅠ」の冒頭は、次のように始まります。

「周知のように光の友のあいだでは非常に評判の悪いこの名前〔ヴツパータール〕は、二つの都市、エルバーフェルトとバルメンを指しているが、この両都市は行程三時間ほどかかる長さのヴツパー河の溪谷にある。」と。「光の友」とは、当時のドイツの反動的状态に対するドイツ・ブルジョアジーの不満を発現した際にとる形態の一つ、ということであります。

冒頭の一文は、ヴツパータールの地理的な、そして当時の政治経済的な状況を端的に表していると言えます。

そして、「ヴツパータールだより」には、後の大作『イギリスにおける労働者階級の状態』（一八四五年刊）を彷彿とさせる、「工場労働者達の労働実態や生活実態の描写」がありますので、少しく紹介しましょう。

「ドイツ中いたる所に見られるような、いきいきとしたたくましい民衆の生活が、ここ（〔中澤註〕エルバーフェルト）ではまったく見いだされぬ。・・・歌を歌うのを聞くが、その歌というのが、アルコール臭い唇にいつも変わらざるのぼってくるまったく低俗なわいせつな歌なのである。ここ以外のドイツ中に知れわたって、われわれが誇りにしていい、かの民謡の一つも耳にすることはない。飲み屋という飲み屋は、土曜日や日曜日ともなると、とくにあふれるほどであり、閉店時刻の夜一時にもなれば、飲んだくれが飲み屋から流れだし、そしてたいは街路に沿っているどぶのなかに眠りこけてしまつて酔いをさますのである。彼らのあいだでもっとも多いのは、いわゆる荷車引きで、まったくさききつた連中であり、宿なしで定職もなく、堆肥や家々の階段口で夜を過せないと、隠れ家や納屋などの乾し草棚や厩小屋などから日の出を待つて、はいだしてくる連中である。当局は、以前には数えきれぬほどあったこれらの飲み屋の数を制限することで、現在ある程度、この状態に制限を加えている。

この行動の原因は明らかである。なによりもまず第一に工場労働のこれにあずかること大なるものがある。酸素よりも煤煙やごみをはるかに多く吸わされてしまう狭く

るしいところでの労働、六歳にもなればたいてい始まる労働は、労働者の精力と生活の喜びをいっさい奪うにいたった。職布工は、それぞれ家に一台の織機を持っていて、朝から夜中まで背中をまげて、そこに坐りつづけて、熱い籠のせいで、脊椎を焦げつかせている。これらの人々のうち、神秘主義におちこまないやつは、酒飲みになつてしまうのである。・・・」(大月書店『マルクス・エンゲルス全集』第1巻、451〜452頁)

(二) ヴッパータル交響楽団の来日に当たって

2008年の夏、ある音楽マネージメントから、「ヴッパータル交響楽団を招聘したいが興味はありますか」と、問い合わせがありました。

名前を聞いただけで、「あります！」と、即答しました。勿論、諸謝金と演目について配慮してほしい旨を伝え、演目については来日公演の目玉曲であるマーラーの作曲でなく、ベートーヴェンの交響曲第三番「英雄」をメインとし、協奏曲はチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲を、そのソリストとしては、1994年の第10回チャイコフスキー国際コンクールのヴァイオリン部門で最高位(第1位なしの第2位)を獲得し、当時日本在住であったアナスタシア・チェボタリョワを条件としました。

(三) 向坂逸郎先生がベルリンで聴いた巨匠達

扉温泉に向坂逸郎先生を訪ねた時、「ベルリン留学時代にフルトベングラー、ワルター、トスカニーニ等の指揮する演奏会に足を運んだ。」という話を聞きました。そして、ゆき夫人も次のように記されています。

「音楽は絵画ほどには関心がなく、ベルリン留学時代、僕は亡命前のフルトベングラー、ワルター、トスカニーニ、その他の名匠のナマをたくさんきいたゾ、・・・、『第九』もすばらしかったよ、なんて自慢する割には音楽のこと私以上に知りません。」(『折々の人』274頁)、と。

(四) メインの演目に「英雄交響曲」を選ぶ

↳ エンゲルスと向坂逸郎先生を念頭に

さて、何故にベートーヴェンの「英雄」なのか、それは『労働者の世界観』(労大新書)に次のような下りがあるからです。

「人間は、歴史上の大事事件すら音に表現することができる。『英雄交響曲』(ベートーヴェン)のように、『一九〇五年』(シヨスタコーヴィチ)のように。」(47頁)と。

そして、エンゲルスはベートーヴェンの「英雄」をナマのオーケストラ演奏で聴いていまして、その時のことを妹のマリー宛の手紙にしたためています。

曰く、「僕よりおまえの方が損なことが一つある。きょう、つまり三月一〇日水曜におまえはベートーヴェンのハ短調シンフォニー「第五」を聴けないだろう。ところが僕は聴けるのだ。このシンフォニーとシンフォニア・エロイカ「第三」は、僕の大好きな作品だ。あとで僕に恥をかかせることのないよう、ベートーヴェンのソナタやシンフォニーをひく練習をしっかりしておくんだな。だが僕はそれをピアノ曲でなく、全オーケストラで聴くのだ。

三月一日。昨夜シンフォニーが演奏された！お前がこの傑作をまだ知らないの

なら、生まれてからまだこんなすごいのを聴いたことがないわけだ。第一楽章のこの絶望的な心の傷つき、アダージョでのあのもの悲しい哀れさ、あのやさしい愛の訴え、第三および第四楽章のあの力強く若々しいトロンボーンによる自由の雄叫び！」『マルクス・エンゲルス全集』第41巻504頁）、と。

ご案内かと思いますが、ベートーヴェンは「運命交響曲」で初めてトロンボーンを使ったのです。

〔註〕念のためですが、「ハ短調シンフォニー〔第五〕」とは交響曲第五番「運命」、「シンフォニア・エロイカ〔第三〕」とは交響曲第三番「英雄」、のことです。

当時は、レコードやCDといった物はありませんでしたから、オーケストラ作品は、ピアノ演奏用に編曲されたもので代用し、サロン等で楽しんでいたというのですが、前述のエンゲルスが自慢げに「あとで僕に恥をかかせることのないよう、ベートーヴェンのソナタやシンフォニーをひく練習をしつかりしておくんだな。だが僕はそれをピアノ曲でなく、全オーケストラで聴くのだ。」と述べているのは、そのことを裏付けています。妹のマリーはピアノでベートーヴェンのソナタやシンフォニーを弾いていたのです。

今では、フルトベングラー、ワルター、トスカニーニの「英雄交響曲」や「運命交響曲」は、それぞれ何種類かのCD化された音源で聴くことができます。そして誰の演奏であれ、この二曲を聴く時、若きエンゲルスを思い出してしまいます。

(2021年2月9日 中澤秀行・つづく)

◇ 読者からのおたより ◇

量から質へ 1985年ごろ、映画、アマデウス観られましたか。神童と言われたモーツァルトにオペラを委嘱したヨゼフ皇帝は、演奏を聴いた時「音符が多い」と評された。モーツァルトは「どの音がいらぬですか」と作曲家としての意地を見せた。その時の皇帝はこう答えた。「人には一晩に聴ける量があり、君のオペラはその限度を超えている」と。もし、人間の頭の中に、直感回路と思考回路があるとすれば、直感回路は無批判に受け入れ、思考回路はそのとおりです。直感回路に入力される発言は天性の資質によるものか、代表的には小泉純一郎です。

スマホにみられるように、のぞき見の世界、傍観者の発想が席卷する中、私たちの「手法」も多少工夫する必要はあるでしょうが、やはり「主体」の強化のために論理を展開するしかありません。過去に、「社会通信」の思想的安定性について、塚本健さんは「ブレなかった」とその不動性について絶賛されていたことを思い出します。それを、私たちが誇りとするならば、粘り強く続けていくしかないし、量的変化が質的变化になる。ここに依拠していくしかありません。言葉が多くても、直感回路にはいらなくても、心配はいりません。真実や真理を見えますから、と。

(滋賀県近江八幡 沢井)

ワクチンによる人権侵害が

9月28日 菅総理は記者会見で「着実なワクチン接種、1日110万回で進み、総接種回数は1億6千万回を超え、アメリカの接種率を抜き、誇らしい気持ちで一杯」と自慢げに語ったが、私はハラが立って仕方がなかった。「10月1日現在、ワクチン接種後の厚労省に届け出た死亡者数は1233人超、届け出は氷山の一角。それぞれの因果関係を調べようとせず、「基礎疾患が多く接種を受けられない人」や「様々な事情からワクチンを受けないと決めた人」に対する差別攻撃が強まっている。「接種拒否は人間失格！」「来てくれるな！」「解雇！」「絶

縁だ！」と言われ、暗い表情で訴える人も少なくない。これは明らかなる人権侵害と捉えてならない。麻疹(はしか)の免疫は終生続くため集団免疫が意味を持つが、新型コロナウイルスは2〜6ヶ月で免疫が切れる可能性大で、2回目接種後でも感染する人が多く、3回目接種の日程も議論されている。

子宮頸がんワクチンについても、今年の10月1日の厚生労働省の検討部会で、安全性や効果などを検討したところ「勸奨を妨げる要素はない」として、これまでの考え方を急転直下変更した。

子宮頸がんワクチンは副作用報告があまりにも多いとして、2013年、一時中止となっていたが、10月1日「積極的勧奨」を言い出したのだ。厚生労働省はホームページで「その有効性と接種による副作用(専門的には「副反応」)が起こるリスクを十分に理解した上で受けるようにしてください。」と、今も広告を出しているのに、この期におよんで何をいうのでしょうか。ますます政府の言うことは信用できない。『通信』No.1344(9月15日発行)に、アドバイスをくださった篤さんが、今考えていることを聞きたくなって、連絡し左の返信をいただきました。(滝野嘉津子)

今考えていること お元気なようで何よりです。今は、夜中で、阿蘇に近い山中のここでは、先ほどからシカの鳴き声がしきりに聞こえてきています。早速ですが、私のほうも、その日暮らしのこの頃で、一貫した主張をお伝えできる現状ではありません。

ネット上のあらゆる分析を参考にし、現在進行している歴史的事態の理解をどのようになすべきなのか、考えを巡らせるばかりです。

基本は、あらゆる可能性を否定せず、事態の進行を見ながら、仮説的な思考を点検していくことでしょうかありません。政権の側が隠したがる事実を陰謀論などと切り捨てるのではなく、考えつくすしかない気がしております。たとえば、人口統計の死者の昨年度よりの過剰数、一月から六月3万8000人ほどは、なぜ増加しているのか。

ワクチン接種後の血栓症による死亡者が多いのは、スパイクタンパクとの関連ではないのか。(コロナ治療薬)イベルメクチンをインドをはじめとして、30カ国以上が使用してコロナに対処したのに、米国のイベルメクチン製造社メルクが新規開発したというのは50%ぐらい効くという新薬ばかりを宣伝し、イベルメクチンを抹殺しようとする動きが、国際的に作られるのはなぜか。

ADE(※)を発症する恐れのあるmRNA(メッセンジャーRNA)の塩基配列部分が、大阪大学などの研究で判明してきたのに、ワクチンの塩基配列から取り除かれない(中国製のワクチンの場合を取り除かれている)のはなぜか。動物実験でmRNAのワクチンの重複接種の危険性が出ているのに3回、4回と打ち続けることは大丈夫なのか。

などなど、今後の結果次第では、人類史最大の被害となりそうな事態です。

(※抗体依存性感染増強といい、ウイルスに対する抗体によって感染が増悪する現象をいう)次に、差別の問題ですが、かつてウィットフォードが東洋分析において、水耕稲作地帯の地域性には、巨大灌漑作業を中心に共同作業の中で、文化としての同調圧が強化されてきたことを指摘しています。西洋型の市民革命など起こりえない地域において、習慣性としての同調はなかなか拭い去れず、いじめや差別の土壌として現在も機能することを、困難な事態の進行する現在痛感しております。部落差別解消の取り組みを中心とした人権確立の取り組みの不完全さを思わずにおれません。被差別の立場から非接種者差別の問題を闘うしかない状況は、現在の日本では当然の成り行きと考えるを得ません。

私も教育現場への全員接種強制などと立憲が主張し始めたので、本当に微力ながら各党・日教組などには意見メールをした次第です。

とりあえずのご返事で、考えていることは、これぐらいしか思いつきません。

(菽芳郎)